
魔恋

j

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔恋

【Nコード】

N8218F

【作者名】

j

【あらすじ】

魔法のような恋（魔恋）にかかってしまった少女リスのえがく、魔法のようなストーリーです。そして、どこか悲しく、切ないストーリーにもなっています。

恋にかかった瞬間。

こんなに君が愛しく見えたのは初めて。

空気が風が太陽がすべてが新しく見える。

そんな感情は初めてだった。

君に会えたからこんな感情ができた。

嬉しかったよ。

何よりも。

すごく嬉しかった。

私がい死んだら俺も死ぬとか言ってたね。

そんなささいな言葉が嬉しかった。

笑ってバカやって、ケガして、私を困らせて。私も君がい死んだら死ぬって言ったら、君がめっちゃくちゃ怒って、本当、君はバカだよ。バカすぎて泣けちゃうよ。

君は出会ったとき、私を見て、指さして笑ってたね。

〈高校一年〉

私は廊下を歩いていった。

「皆知らない人ばかり。おまけに、寝ぐせついてるし、ついてないなあ。」

その時の私は、髪の毛は所々にメッシュのような青い髪がまじっていた。だから皆近寄って来なかった。

すると前に髪の毛をオレンジに染めた男の子と真っ黒できれいな髪の毛の男の子二人が私を見ていた。

そしてオレンジ色の髪の方が私を指さして黒髪と一緒に笑っていた。

私は男の子達の方に行った。

「何？私おかしい？」

「へへっ、面白くてさ。」

「寝ぐせついてて、笑っちゃった。ごめんね。」

オレンジ髪の方はヘラヘラしてて、少しいらだつが、黒髪の方は真面目そうで、けっこうタイプだ。

「ねー、名前教えて？」

私は黒髪に話かけた・・・はずなのにオレンジ髪が

「俺の事はイクトって呼んで！！」

「あ、そう。で、君は？」

「俺はせいじでいいよ。」

「せいじ、私はリスって呼んで。」

「リスー？可愛い名前。」

「あのサイクト、私せいじに話しかけてるんだけど・・・。」

「そんな気にすんなよー。」

だってリス、俺に話しかけてくれないんだもん。」

「はいはい、ここまで。リスちゃん、そろそろ教室戻るね、放課後、またむかえにいくね。じゃあね。」

「リスー！バイバーイ！」

「うん。じゃあね。」

そう言うとき私はそれぞれの教室に戻った。

教室で私の頭に残っていたのはせいじだった。

私はあの時、あのほんの少しの時間で、せいじに恋してしまったんだ。

思い込みの運命。

私は魔法にかかったように、頭にせいじが残っていた。

今の私の中で、恋とは魔法なのだ。【魔法の恋】略して魔恋。

私は魔恋にかかってしまった。

心の中できゃいきゃい言ってたらずぐに放課後になった。

「リース！」

「えっ、イクトだけ?！」

「そーだけどー。」

「せいじは?」

「せいじは今日、急ぎの用ができたからって帰った。」

「そーなんだ・・・、じゃあ帰る。」

私が帰ろうとした瞬間。

「ダメだよ。」

イクトがにつこり笑って私の手をつかんだ。

「今からリスは俺だけのリスだから。」

「はっ？何言ってるの？」

「リス、どこか行きたいところとかないの？」

「別にない。」

私は少し、キレぎみに言った。

すると突然、

「イクトー！リスちゃん！」

せいじが走ってきた。

「あれっ、せいじ、もう用事終わったのかよー。せっかくこれからリスと二人きりのチャンスだったのにー。」

「なにいつてんのよ！」

「あはは、じゃあどこ行く？」

「やっぱ、喫茶店だろー！
だよなっ？リス！」

「喫茶店・・・いいよ。ちょうど今あつかったんだよね。じゃあ行こっ、せいじ。」

「俺を忘れるなよー!」

そして三人で喫茶店に入った。

「じゃあ、あらためて、せいじ、メアド交換しよう。あと電話番号も。」

「俺ならいーよー! リース!」

「だから私はイクトじゃなくて、せいじに聞いているの!」

「まあまあ、三人皆でこうかんしよう。ねっ、イクト、ねっ、リースちゃん。」

「俺は賛成だな。リースは?」

「しょうがない、賛成するわ。」

そして、三人でメアド交換をした。

《ピッ》

「あれっ? リス、メアドに魔法って言葉入ってる。」

「イクトも、魔法って言葉入ってるわね。」

「俺ら運命じゃね？」

「なーにバカ言ってるのよ。あんたに運命感じるわけないでしょ。」

「俺はリスが彼女でもかまわねーぜ。」

すぐくニコニコしているイクトにリスは言った。

「私が嫌なの！あんたなんか、誰が彼氏にするか。」

その時、

「やばっ、もう我慢できな・・・ぷ、ははははは！」

「えっ？！せいじ、いきなりどうしたのよ？」

「だってさ、二人見ると面白いからさ。」

「俺ら、運命共同体だから。」

すると、リスはイクトの頭をたたいた。

「あんたさあ・・・何回言えば気がすむのよ！！！！！」

ついにリスはキレた。

「運命なんてないのよ！ってか運命は私の中で魔法って意味！だか

「私にあんたとの魔法が、かかったとは思えないわ！」

月の夜・危険な時間。

イクトはしばらくポカンと口を開けて見ていた・・・が、

「ははっ！リス、お前面白い事言うんだな。」

「私は本気よ！私は、運命って言葉より魔法って言葉が好きなの！だから、恋も運命も私の中で魔法なの！」

その時、せいじが言った。

「いいんじゃないかな？俺、そうゆう考え方、すごくいいと思う。」

「だよね！」

ほーら、せいじは、ちゃんとわかってくれる。」

「あーあ、そーやってせいじはリスをかばうんだー。
好きなの？」

リスは心臓の鼓動がはなくなり、驚いた。

「なっ、何言ってるのよ！ねっ、せいじ・・・。」

「えっ、好きに決まってるじゃん！
リスちゃんは友達なんだからさ！」

リスはポカンとなった。

「えっ……。」

「なあ、せいじ……、お前……天然？」

「イクト知らなかったっけ？
俺、超天然だよ？」

「はあ。もういい。もう暗いし私帰るね。
じゃあね」

そういつてリスはお金を置いて一人で暗い道を帰っていった。

「リスちゃん、帰っちゃったな。イクト。」

「うん……。」

その頃リスは、せまくて暗い道を一人で歩いていた。

「なによ！イクトもイクトでせいじもせいじよ！」

すると、誰もいなかったはずの暗い道に前と後ろから男が全員で五人来ていた。

リスは少し怖くなり、はや歩きで歩いたが、一人の男に腕をつかまれてしまった。

「はなして下さい！」

「可愛いね。」

でもさあ、そんなに可愛いと犯されちゃっつよ？」

男たちは笑いながらリスを見ている。

「やめてよ！はなして！」

リスは必死に抵抗した。

すると、そのグループのリーダーのような一人男がつぶやいた。

「もしかして、今ここで俺らに犯してもらいたいんじゃない？」

リスは恐怖で手足をがくがくふるわせた。

「いつ、いや、やめて、来ないで!!」

すると、

「あーあ、リス、綺麗な手、そいつがさわったせいで汚れちゃったね。」

「え・・・?」

そこには、イクトがいた。

「だ、誰だデメエ!?!」

「うるさいなあ、あんたら黙ってよ。」

そんな汚い声聞いたら、俺まであんたらみたいに汚くなっちゃまう。」

「イクト・・・、なんで?なんでここに!?!」

するとイクトはいつものようにニツコリ笑って答えた。

「だって俺ら運命・・・いや、魔法にお互いかかったから。でしょ？リス。」

リスは落ち着いたように笑って答えた。

「・・・バカ。」

「くそっ・・・」

あつ・・・そうだ。おい、お前！イクトとか言う奴！

俺らの仲間になんないか？それで一緒にその女を犯しちまおう！」

「は？俺が？何言ってるの？あんた。」

「お前もその女を犯しちみたいんだろ？」

「俺は、そんな汚ねえ事しねえ。」

俺は、リスの魔法にもっとかかりてえんだ。リスが笑って、俺が笑って、せいじが笑って・・・ただそれだけでいい。」

リスは驚いたが、少し心臓の鼓動がはやくなっていることにきずいた。

「イクト・・・。」

「って事だ！はやく、俺らの前から消えな、あんたら。今度またリスを犯そうとしたら・・・あんたら殺すから。」

「ちえっ！

行くぞ！」

男達は帰って行った。

その後、何も言わずに、二人で帰った。

その日は月が綺麗で、まるで、魔法で明るくてらされているようだった。

そしてイクトはリスの家までついて来た。イクトはバイバイと言って、後ろを向いて帰ろうとした瞬間リスはとめた。

「待つて、イクト・・・なんであそこにいたのわかったの？」

「さあ？なんでかな？リスが泣いてたからかな。」

「イクト・・・。

ありがとう。」

そのままイクトは何も言わずに後ろをむいて、手をかるくひらひらさせて走って行った。

リスはその姿をただ見つめていた。
ずっと、ずっと・・・。

その姿が見えなくなると、リスはゆっくり家に入った。

夜遅くに、リスは自分のベッドに横たわり、ケータイに、日記を書いていた。

『私はイクトに、』

で、手が止まっていた。

「はあ・・・。

魔法・・・、そんなの私、イクトにかけてないよ。」

するといきなり、メールの着信音が鳴った。
それは、せいじからだった。

《リスちゃん、今日大丈夫だった！？
せいじから聞いたよ！おそわれなかった？》

そう書いてあった。

《大丈夫。イクトが守ってくれたよ。》

しばらくして、またメールが来た。

《そっか。

きつと、イクトはリスちゃんの魔法にかかったんだよ。》

なぜか、その後リスはせいじに返信せずに、ケータイを閉じた。

く勇気の魔法く（勇魔）。

次の日学校に来たリスは驚いた。

そこには、昨日の夜にリスを犯そうとした男5人が転校してきていた。

「え……………」

「いや…………嘘でしょ？」

すると男は先生にすました顔で得意そうに喋りかけた。

「先生！俺ら、リスと知り合いだから、席近くにしてくれない！？」

「な、何言ってるの！？」

「先生、私そんな人達知りません。」

その後、先生は話をかたずけてリスの席の近くに5人を座らせた。

「よろしくね…………リスちゃん。」

ずっとリスは怖くてうごけなかった。

そのまましばらくして、休み時間になった。

チャイムが鳴ると同時にせいじとイクトがリスのクラスに入ってきた。

「おい！あんたらなんのつもりだよ！？」

昨日、またリスを犯そうとしたら俺があんたらを殺すって言ったよな！？」

5人の中の1が言った。

「さあ？なんのことが俺らさっぱり分かんねえなあ？」

「デメエら！！」

イクトが殴りかかろうとした瞬間、リスがそれを止めた。

「イクト・・・やめて。大丈夫、大丈夫だから、手をだしちゃ駄目だよ・・・。」

「何言っただよリス！」

こいつらは、きつとまたリスを!!」

「いいから！手を出さないで!!」

「ははは!!」

女が言った事だけでやるなんて、かつこわる。」

「違う！リスは特別なんだ！」

「特別う？お前バカなんだな。」

人間に特別も何もねえよ！人間は変わらねえ、ただの『人』なんだよ！」

言いかえそうとしたイクトの前に突然、せいじが出てきた。

「リスちゃんは違うよ。普通の人間とわ・・・お前らともぜんぜん違う！」

「かつこばかりつけて、調子に乗んなよ teme エラ！俺らがもし、リスチャンを犯してあげたとしたら、同じような態度はとれるかな？」

その時、リスは怯えながら、驚いた。

「い、いや……。」

「テメエらいい加減にしろよ!」

イクトがまた殴りかかろうとした瞬間、男の一人が笑いながらイクトにむかってこう言った。

「女との約束も守れないのかよ。
手・を・出・す・な、だったよなあ?」

「おい、リス!なんで手を出しちゃ駄目なんだよ!?」

「そんなことしたら、イクト、学校やめなきゃいけなくなるし……
こんな人達のためにイクトが手を出す意味ないよ!」

「リス……。」

「私、そんなの嫌だよ……。
それに、まだイクトとせいじに私の魔法にかかってほしいからさ……」

「。。」

泣きそうになりながら、リスは笑った。

「仲良しごっこかよ?! むしずがはしるな! 俺らがリスチャンをめちゃくちゃにしてやるよ!!」

「そんなこと、させねえ。」

何があっても手は出さねえ。

でもなあ、俺らが守んだよ! リスを!」

「何言つてんだよ!? テメエらなんかに女が守れるかよ!?!」

「守れるかどうかじゃない。何があっても守るんだよ!」

イクトの発言に、リスは泣きそうになった。

「守って・・・ほしいよ・・・。」

守ってほしいよ!!」

イクトとせいじに守ってほしい!」

イクトはゆっくりリスを抱き寄せた。

「俺とせいじがお前を守るから、何があっても守るから!!
だから……、だから笑って、まだまだ俺らに魔法かけてくれよ。」

そこに、またリーダーのような男が割って入ってきた。

「お前ら見てるとム力つくんだよ!!
仲良しごっこもここまでくるとキモイな。」

リスは怖がりながらも言い返した。

「なんで貴方達はそこまで私達につきまとうの!? もういい加減にしてよ!!」

「なんでつきまとうか?
そんなの決まってるじゃん。
リスチャンを犯してみたいから。」

「だから、リスは俺らが守るって言っただろ!」

「そんなのお前らにできるわけないだろ!
なにが魔法だよ! なにが笑顔だよ!

笑わせるんじゃない！」

その時、リスは少しキレながら言った。

「笑いたきゃ、笑えばいいじゃない。」

「なっ、なんだと！？お前、あんま調子乗んなよ！！！」

《がきいいいい》

ほほにパンチがおもいきり当たった音が響き、床に転がり、机に当たる音も響いた。

悲しみ・醜いじぶし。

「きやああああ!!」

教室にいた女の子が、目の前で起きた事に驚いて悲鳴をあげてしまった。

そこには、リスが横たわり、ぐったりしていた。

ついに押さえきれなくなり、イクトはリスを殴った男を殴った。

《バコオオオン》

リスはその姿を見て、イクトに怒った。

「イ、イクト……、なんで殴ってんのよ……。」

「バカ野郎!!」

なにが魔法だよ!なにが約束だよ!

その程度の魔法や約束なら俺は簡単にやぶる。

お前は俺の心配するんじゃないくて、自分の顔でも心配してる!」

「リスちゃん、今度ばかりは俺もイクトに賛成だよ。」

「せいじまで……。」

せいじは優しくリスの頬に触れた。

「リスちゃん……頬、こんなにはれてる。」

「テメエら、女に、しかもリスに手を出すなんて汚すぎじゃねえか!?!」

「ふつ、じゃあお前らは、さっきリスチャンに言った、【守る】とゆう言葉は忘れたのかよ?」

「……俺は確かにリスを守れなかった。
だからこそ次から、もっと、守りたいって思うんだよ!」

その時、先生が教室の中に入ってきた。

「なにやってんだお前ら！！」

さつき女子生徒の叫び声が聞こえたが・・・。

とにかく、男子生徒二名！自分の教室戻れ！他のやつらは席につけ！！」

そこでリス達は、わかれた。

「お前ら、さつき何があつた？」

「・・・・・・。」

リスは話そうとしなかった。

「おい！」

「先生に、関係なんてないです。」

先生は怒った。

「じゃあかってにしる！」

その後、時間はすぐにたつて放課後になった。

五人の男達は走ってどこかに行ってしまった。

リスはその姿を見ながら、イクトとせいじの教室に行ったが、二人はいなかった。

リスはそのまま下駄箱に行き、靴をはいて学校の裏あたりまで歩いて行くと、

《ドスツドスツ、》

「うつ、うつ・・・」

と言う声が聞こえてきた。

のぞいて見ると、五人の男達がイクトとせいじをボコボコに殴っていた。

「な、なんで!？」

「はぁ、はぁ・・・」

ふん、いいきみだな。」

イクトは男の一人をにらみつけた。

「なんだよ、その目は、お前らがリスチャンのかわりに自分たちがぎせいになるって言っただろ。」

「嘘・・・そんなの、嘘・・・でしょ？」

リスは、おもわず飛び出してしまった。

「リス!？」

「リスちゃん!？」

「なんでよっ!？」

「なんで言ってくれないの!？」

「私のかわりに、ぎせいになるなんて・・・。」

「・・・リスの事、守るって言っただろ。」

「イクト・・・せいじ。」

「リスちゃんを、守るから・・・。」

「もう、いいよ。」

・・・、あんた達、私を襲いたきや襲いなさい!!」

「リス!？」

なに言っただよ!」

「もう我慢できないの!!
みてられないの。」

「マジかよ、ラッキー。」

その時、男の一人がリスの肩に手を置いた。

すると、イクトは怒りくるったように叫びだした。

「うわああああ!!」

やめろおおおお!!

リスに手を出すなあああ!!」

《パーン、グキィィ》

イクトのおもいきり力を込めて出したがこぶしが、男の頬にヒットし、骨が壊れたようなにぶい音がした。

「うっ、うぎやあああああ！！！！
血が、血が止まらねえよおおお！！！」

男は叫びながら走って行った。
他の男達も続くように走って行った。

やらやきやいけない事。

「何やってんのよ・・・イクト。」

イクトは息を荒くしながら下を向いている。

「はあ、はあ・・・。」

「イクトが学校やめたら、また楽しく学校、行けなくなるんだよ！
三人で笑えなくなるんだよ！」

「・・・俺だって、殴らないようにしてたさ・・・でも、そうしな
きゃ、お前はあいつらに犯されてたんだよ！」

「かつこばつかつけないでよ！
私にだってやらやきやいけない事があるの！」

「やらやきやいけない事ってのは犯される事なのかよ！？
そんな汚ねえ事なのかよ！？」

「そうだよ！もうほっといて。」

リスはどこかに走って行った。

「これしか・・・」

私にはできないよね？イクト・・・せいじ・・・。」

リスが向かったのは男達のところだった。

「お願いします。なんでもします。」

だから、もうイクトとせいじに手を出さないで。」

「なんでもするだど？」

「犯したきゃ犯して。」

「俺らの望んでる事はそんな事じゃねえんだよ。」

「じゃあ何？」

なんでもしていいから。」

「仲間の顔の骨を壊した罰だ。
お前も殴らせろ。」

「わかった・・・」

「よし、こいつをつるせ」

リスはがくがく震えていた。
恐怖でいっぱいだったから。

その頃、イクトとせいじはリスを探していた。

「リス　　！」

「リスちゃ　　ん！」

「くっそ、どこにいるんだよ！」

「・・・リスちゃん、あいつらの所？」

「あいつら・・・、
許さねえ!!」

その頃、どこかの倉庫から、たえまなく、人のうなり声が聞こえて
いた・・・。

「・・・うつゝ、うつゝ・・・うああ!!」

《ドゴッ、ドゴン》

「俺はなあ、お前以上に苦しい思いをしたんだよお!!」

《バゴンッ》

「うつゝ、ブハア!!」

リスの口から、血が吹き出した。
頬もはれて、体もあざだらけだ。

その時、イクトとせいじが来た。

「イ・・・イクト、せ・・・いじ。」

「デメエら・・・。」

「へっ、俺らはなあ、女だからって容赦しねえんだよ!」

「来ないで・・・
気がすむまで、殴らせてあげて。」

「リスちゃん!?
何言ってるの!?!」

「いいから・・・
来ないで。」

「・・・わかった。」

「イクト！？何言ってるんだよ！？」

イクトはゆっくりうしろを向いた。

「リスは、かたをつけるって言ってるんだ。
リスは、強い奴だから、俺は信じる・・・信じられるんだ。」

「ありがと・・・、イ・・・クト。」

「わかったよ。」

俺も、リスちゃんを信じるよ。」

せいじもゆっくりうしろを向いた。

「二人共、ありがと・・・。」

「いい度胸じゃねえか。
よし、続けるぞ！！」

それから、一時間くらいリスは殴られ続けて、やっと男達から、解

放された。

「リス……。」

「二人共……、信じてくれてありがとう。」

「このっ、バカリス!!!
心配させやがって。」

「そっだよリスちゃん！心配したんだからさ！」

「でもこれで、おあいこでしょ？」

「じゃあ、許してやるか。」

「やりー！」

「じゃあ、明日ケリつけにいくか。」

「うん。」

もう、この出来事を終わりにしなきゃね。」

そしてリス達は別れて家に帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8218f/>

魔恋

2010年10月10日01時45分発行